多文化をあきなう

貴重な植生と限界地の暮らしを守る
ルイボス茶のフェアトレード

池上甲一（いけがみこういち）
近畿大学教授

フェアトレードは運動であって、到達点ではない。生産者や労働者の生産や生活、あるいは意識に影響を与えたその先に何があるのか。南アフリカ、ルイボス茶生産の現場から紹介する。

ルイボス茶の生まれ故郷

日本でも最近になって、ルイボス茶が知られるようになった。ルイボス茶は、ルイボスというマメ科植物の枝葉を発酵させたハーブ茶である。ルイボスは、南アフリカの西ケープ州と北ケープ州の一部だけで生育する。この地域の年間降水量は一五〇ミリ程度、夏の気温はときに四〇度におよぶが、冬には零度近くに下がる。こうした厳しい気候のため、年間を通じて荒涼とした景観がこの地域を覆っている。

ところが、いったん雨が降ると、この地域は花の絨毯（じゅうたん）を敷き詰めたかのように鮮やかな色彩に満ち、多数の観光客が訪れて、町は活気を帯びる。フラワー・ツーリズムが地域を支えているのである。だから、脆弱（ぜいじゃく）な生態系をしっかり守る必要がある。資源の持続的な利用が生態系管理上からも重要な課題となっている。

商品特性と寡占的な市場構造

ルイボス茶はカフェイン・フリーで抗酸化作用があり、健康によいという理由で世界的に人気が拡大している。だがその生産は、南ア資本のルイボス茶加工メーカーや、多国籍紅茶メーカーと契約関係にある、白人経営の大規模農場が大半を占めている。こうした農場のなかにはみずから加工場をもって、一次加工をおこなうところもある。

市販・輸出されているルイボス茶の大半は少数の大手メーカーによる製品である。この寡占的な市場構造を補強しているのが、南ア・ルイボス茶評議会である。この評議会は大規模農場主、加工メーカー、小売関係者をメンバーとし、ルイボス茶の基準・規格を決めている。しかし、黒人や混血のアフリカーンス人が大半を占める小規模農民の要求はほとんど採用されることがない。

このことは、ルイボスが育つ地域の農民たちにとってどういう意味をもつのだろうか。この地域では厳しい自然条件のために、食料作物の生産は難しい。だから、ルイボスを細々と生産するか、大規模農場の賃労働者として働くくらいしか生計手段がない。ルイボスも、大規模農場に高い料金を支払って製品に加工するか、ルイボスを言い値で買い取ってもらうか選択せざるをえない。つまり、大規模農場に依存する枠組みから抜け出ることは難しいのである。

ルイボス茶のフェアトレードとアイベルド協同組合

北ケープ州で、この状況を決定的に変えたのが二〇〇一年に設立されたアイベルド協同組合である。アイベルドは二〇〇一年に複数国の有機認証を、二〇〇三年にフェアトレード認証をそれぞれ取得した。また、二〇一〇年には有機とフェアトレードのダブル認証も取得している。

アイベルドが重視しているのは有機栽培であり、フェアトレードを始めたのはその販売先を確保するためである。というのは、ルイボス茶自身が寡占的に取引されているうえに、フェアトレードのルイボス茶の市場規模もまだ小さいという現実のもとで、貴重な生態系保全に役立つ有機農業を前面に打ち出しているからである。

もちろん、フェアトレードによる経済的成果も大きい。とくに、グループや地域社会の社会的発展や能力開発を目的とするフェアトレードの社会プレミアムなどの資金を利用してできた加工場によって、農民は大規模農場に依存しなくてもよくなった。この点で、フェアトレードの意義はとても大きい。

具体的な作業としては、まずルイボスを機械によって細かく裁断する。次に、この裁断されたルイボスをコンクリートの乾燥場に一二時間放置した後、二時間ごとに木製のレーキや長い棒で数回かき回す。この過程で、ルイボスは自然発酵して色が赤変する。乾燥したら袋詰めして保管する。殺菌と包装には専用の設備が必要なので、外部委託している。

アイベルドのルイボス茶は有機農業がセールスポイントである。だから、ルイボスの栽培だけでなく、加工工程でも環境的な持続可能性を重視している。そのために機械に頼るのではなくたくさんの手作業を組み込んでいる。このこだわりは、有機農業（持続可能性）とフェアトレード（仕事の確保）の基本的な考え方を結びつけるものである。

高まる農民の自立意識

農民たちはフェアトレードによってどのように変わったのだろうか。ある村でおこなった調査から、いくつかの興味深い事実がわかった。まず、高齢女性がアイベルドでいろいろなポジションに就き、大きな社会的役割を果たしている。次に、NGOと一緒にする参加型調査によって、農民は環境や生態系に高い関心をもつようになった。さらに、組合の設立に始まって、有機農業やフェアトレードなど組合の方向性を主導してきたNGOから自立しようという志向性が大きくなっている。この点は、フェアトレードからの「卒業」を考えるうえで重要な示唆を与えてくれる。NGOとの協働といっても、現実には指示―服従という側面が避けられない。フェアトレードで力をつけた農民は、そのことを克服すべき課題として認識し始めている。それはフェアトレード本来の目的である、自分たちで物事を決めていく力の強化を意味している。こうした意識がみんなで共有されると、フェアトレードからの「卒業」が議論できるように思う。

メルクラール村の典型的住居

アイベルドのマネージャーたち

上：粉砕したルイボスを集める
下：発酵したルイボスの粉末を撹拌（かくはん）する

上：ルイボスを刈取る
下：ルイボスの枝を切断・粉砕する

雨が降ると花の絨毯に覆われるメルクラール村の大地